



あとがき



最近、わずかに世界から遅れて本邦の原子力・放射線の分野にも機械学習の波がようやく到来してきたと感じております。2019年秋の原子力学会企画セッションで、我々の取り組んでいる事例を交えて、「機械学習とは何か」という基礎的な話題を提供させて頂きました(核データニュース2020年2月号参照)。それからほんの1,2年経過しただけですが、本号の会議特集にあるように応用研究が主題として扱われるようになってきたのもその証左です。特に新型コロナの影響で移動が制限される中、パソコン1台で始められる機械学習に新規に取り組み始めた方も多いと想います。JNSTの編集の仕事をしていても、少し前まではタイトルに機械学習に関連するワードが含まれていれば概ね中国からの投稿でしたが、最近は日本からのものも増えてきています。

例年通り本号は、他にも「区切り」となる方々にご寄稿頂きました。ひとつの仕事の最後の1年間にこのような状況になり、思い通りにいかなかったこともあろうかと思えます。また、新たな場所・立場でのキックオフの期間も同様の環境で迎えているかもしれません。これまでより、さらに一層のご活躍を心よりお祈り致します。

さて、この1年間私たちの分野にも機械学習の技術が染み渡っていった多くの技術的課題が解決されていったのと同様に、各々が、そして社会が工夫してこの困難を乗り越えようとしています。オンラインの技術は革新的に進みました。単なる慣習で続いていただけのあまり大切な作業の簡素化。さらにビデオ会議システムのおかげで、むしろ顔をお互いに見る機会は増え、国際化も逆に進展した多くの事例。しかし一方でお互いに接する機会が減少したデメリットも確かにあります。各々が学会の質疑応答のあの5分はむしろ前座であって、真打ちはセッション後の廊下に現れていたのだと気がついたり、その後の宴のなかで共同研究がスタートしたりしていることを思い出したりしたことでしょう。一日でも早く状況が好転し、オンライン化・対面の利点の双方を享受できる日がきますように。

金 政浩 2021年6月

日本原子力学会核データ部会

核データニュース編集小委員会

合川 正幸 (北大)

岩本 修 (原子力機構)

大塚 直彦 (委員長、IAEA)

金 政浩 (九大)

小浦 寛之 (原子力機構)

中村 詔司 (原子力機構)

丸山 修平 (原子力機構)

山野 直樹 (RADONet)